

チェルノブイリ通信

2004年12月20日

No. 62

発行 チェルノブイリ支援運動・九州 事務局

連絡先 福岡県遠賀郡水巻町下二西3-7-16(株)ウインドファーム内
TEL・FAX 093-203-5282

E-mail jimmu@cher9.to

URL <http://www.cher9.to/>

郵便振込口座 01770-1-65328 チェルノブイリ支援運動・九州



覚えている方も多いはず。1995年に来日したリュドミラ・チュプチュクさん。現在、ミンスク教育大学の4年生で教育実習に忙しい毎日を送っている。卒業後は、いよいよ長年の夢であった教師となり、教壇に立つ。

* 第4回ブレスト検診報告

* 検診における
臨床検査技師の仕事

* 医学生が見た
チェルノブイリの検診活動

* 工房のぞみ21、
ナターシャさんからのメッセージ

* あるウクライナ人との出会い
事務局日誌から

* ベラルーシの歴史について
案内人 山口英文 (運営委員)

* チェルノブイリ報告会

* ノーモア・チェルノブイリ
手嶋雅弘チェルノブイリ写真展その2

ビテフスクでの検診と 医師育成の確かな手応え

■第4回ブレスト移動検診の概要

10月末、ベラルーシは例年より暖かい初冬を迎えた。森は朽ち葉色に染まり、移動する車の窓からは、白樺の白い幹や針葉樹の深い緑とに映えて美しい。深い朝霧と、しとしと小雨の落ちる朝とが交互に続き、道を歩く人はコートの際を立て早足で行き交う。この時期、郊外の農村では村びとたちが最後の冬支度にせわしいことだろう。

チエルノブイリ支援運動・九州は、今年10月23日(土)～11月7日(日)の期間、ベラルーシへブレスト移動検診団を派遣した。ブレストでの医師や検査技師が参加する検診団としては3年目で、今回が第4回検診となる。

今回参加したメンバーは、先発チームが武市宣雄医師(広島甲狀腺クリニック院長)、三本亜希臨床検査技師(同)、星正治教授(広島大学原爆放射線医科学研究所)。後発チームが清水一雄医師(日本医科大学第二外科教授)、渡會泰彦臨床検査技師(同付属病院病理部)、賀来佳男さん(日本医科大学4年生)。全行程参加したのは、ロシア語医療通訳・コイディネーターの山田英雄さん、通訳のマリーナ・チャイキナさん、事務局から寺嶋という9名だった。

今回は、ブレスト検診に加えて、ベラルーシ北東部のビテフスク市でのガン検診と、ミ

ンスクでの医学シンポジウムも行った。首都ミンスクから東北へ350キロ行ったビテフスク市での検診を武市医師を中心に行い、ミンスクで医学シンポジウム開催後、後半チームの清水医師が現在のプロジェクト地であるブレスト市で検診を行った。ブレストは、ミンスクより西方600キロに位置するため、ミンスクを挟んで東へ西へとベラルーシをほぼ横断した形になる。

今回届けた支援物資は、エコー1台(ビテフスク州内分診診療所)、顕微鏡1台(1番病院国立ガンセンター)、検診器具、検査試薬(ブレスト州内分診診療所)ほかだった。エコーと顕微鏡については、「通販生活『チエルノブイリ母子支援基金』」からの助成を受けた。その他、NGO「コンフィデンス」への支援や、会員の皆さんから寄せられた「のぞみ21」への支援カンパ1800ドル(約20万円)を届け、「のぞみ21」からはクリスマス商品を含む民芸品を購入し持ち帰った。

■ビテフスク市での検診

「非汚染州」の抱える実状

ビテフスク州はベラルーシ共和国の最も東北に位置しロシアと隣接する。その州都がビテフスク市で、画家マルク・シャガール生誕の地でもある美しい町である。大戦中にはドイツ軍の進撃を受け、多くの建物が破壊されたという。

ブレストでの第4回検診となる今回は、初めてのビテフスク州内分診診療所での甲状腺ガン検診と医学シンポジウム、ブレスト州内分診診療所での検診というスケジュールを終え、11月7日に日本へ帰国しました。現地での様子を報告します。

チエルノブイリ支援運動・九州
運営委員 寺嶋 悠

これまで汚染地において甲状腺検診を行ってきたが、放射能の影響を正確につかむためには、非汚染地の甲状腺(ベラルーシにおける「健康な」甲状腺)の状態を調べる必要がある。今回ビテフスクで検診を行ったのは、この比較のための基準となるコントロール(照査基準)を定めるためと、日本では情報の少ない非汚染地の様子を調べるためだった。

ビテフスク州は、チエルノブイリに近い南部の州と違い、「非汚染地」指定を受けている州である。確かに汚染地図を見ると、赤やオレンジ、黄色の汚染エリアにはほとんど含まれていない。実際には、極めて低濃度ながら広い範囲で汚染を受けていたり、局地的なホットスポット(高濃度汚染地点)などもあつたりするが、一般には比較的「きれいな」州とされているという。

ビテフスク市の州立内分診診療所においては、2日間で59名の甲状腺ガン検診を行った。州立内分診診療所は、全州の甲状腺疾患を持つ患者のデータがある州のセンターである。ブレスト検診と同じく、現地医師たちが一度検診を行い異常の見つかった患者さんたちが、中にはガンと疑われる症例も数例見つかつた。血液や尿検査、細胞診結果と合わせて、一日も早く、正確な診断結果を患者さんへと返す予定である。



ビテフスク検診では、アルツール医師たちも協力しに駆けつけてくれた



「ビテフスクには22000人の汚染地からの移住者がいます」
ビテフスク州立内分泌診療所院長のガリーナ医師

■「今後も継続した関係を」 ビテフスク州立内分泌診療所より

ビテフスク州立内分泌診療所のガリーナ所長は、「今回、ブレストでの取り組みには大きな刺激を受けた」と語る。
「非汚染州指定を受けているビテフスクでは、NGOや国際赤十字、政府などによるブレストなどのような移動検診システムはありません。その一方で、ビテフスク州には22000人の汚染地からの移住者が暮

らしており、内分泌でも甲状腺や糖尿病など多くの疾患があります。移住者が主に住んでいる農村の病院は、医療技術や設備もまだ不十分で、地方と中央との医療格差は同じビテフスク州内でもあり大きな課題の一つです」。非汚染州なので被曝と関係した病気はないとされるため、医療面での政府のケアが後回しになるのだと言う。ガリーナ医師は「今回支援運動・九州の皆さんが検診のために訪問してくれたことに深く感謝しています。ブレストのチームの取り組みを知ることでもできた結果、地元医師たちと話し合い、できれば今後ビテフスク州にも彼らのような移動検診チームを作りたいと考えています。技術や設備面では彼らのような質の高さには及ばないでしょうが、その効率的なシステムをビテフスクでも確立できるように進めていきたい。支援運動・九州の皆さんとはこれからも永い関係を続けていけたらと思います。」と語った。

■ブレストの医師たちからの協力

ビテフスク市での検診では、アルツール医師やウラジミール医師ら、ブレスト州国際赤十字移動検診チームの医師4名が全面的に協力してくれた。エコーや顕微鏡、検診に必要な機材、試薬などを、ブレスト州立内分泌診療所からおおよそ1000キロも離れたビテフスクまで貸し出ししてくれた。ブレストからもエコーを持ち込んだのは、今回ビテフスク州立内分泌診療所に支援物資として届ける予定だったエコーが、万が一ミンスクの税関で止められた場合に備えてのことだったが、その懸念は残念ながら当たってしまい、滞在中に病院に実物を届けることはできなかった。アルツール医師と日本側との、念には念を入れた準備によって滞りなくビテフスク検診ができた。

移動検診に慣れている彼らのおかげで、採血・採尿・問診・触診・エコー・吸引穿刺・細胞をプレパラートに固定、という一連の流れがスムーズに進んだ。アルツール医師は、初めて検診に参加したビテフスク市の医師に対して、武市医師のエコー診断、吸引穿刺の技術について終始解説を加えてくれた。ウラジミール医師も、患者一人一人にカルテを作成して丁寧なデータベースを作り触診を行うなど、指導的な役割を果たしてくれた。

5年前、私がストーリーリン地区での検診に参加した際にも彼らの姿を見ていたが、今回ブレストスタッフの働きを見てみると、日本の医師が中心だった当時に比べて、格段に頼もしくなっていることを実感した。また以前支援運動からブレストへ届けたエコーや顕微鏡が、こういった形でビテフスクでも活躍していることを知りうれしく感じた。

アルツール医師たちの参加する国際赤十字移動検診チームがあるのは、ベラルーシではゴメリ、ブレスト、モギリョフの3つの汚染州のみ。中でもブレストチームは、支援運動の検診に加わり日本の医師から直接技術を学んでおり、日本赤十字広島県支部と広島県(HICARE)や広島大学・原医研の招聘による技術研修を受けた経験もある。高い医療技術と診断の信頼性、効率的なシステム確立という点でベラルーシ国内でも高い評価があり、ベラルーシにおける一つのモデルケースとして、着実に専門家庭教育、技術移転へとつながってきている。その評判は、ビテフスクまでも届いており、ビテフスクの医師たちにとって、今回ブレストのスタッフと交流の機会となり大変喜ばれた。

非汚染州ゆえの 医療対策の遅れ

第二世代の専門家育成へ

■国際医学シンポジウムの開催

11月29日には、10番病院医学再教育センターにおいて医学シンポジウムを開催した。今回のシンポジウムは、98年、99年、00年に続き、4回目のシンポジウムとなった。

シンポジウムでは、ロマノフスキーベラルーシ赤十字総裁やラリサ・ダニーロバ10番病院内分泌室教授からの挨拶に続き、ご臨席いただいた森野善郎在ベラルーシ日本大使からも挨拶をいただいた。「日本とベラルーシとの間で、このような協力が行われていることを大変よろこばしく思う。地道で着実な取り組みは、時がたつても長く地元に残っていくもので、同じ日本の政府を代表する者として、支援運動の取り組みに感謝する」と、日本ベラルーシ双方の取り組みに対し、感謝を述べられた。

続いて、星正治教授（広島大学原爆放射線医科学研究所）が放射線医学について、武市宣雄医師が甲状腺疾患の症例と診断について、スライドを用いて報告があった。また支援運動・九州の取り組みについて私も報告し、団体の目的や概要、現在取り組んでいる「ベラルーシにおける甲状腺がんの早期発見・診断のための移動検診プロジェクト」について、ストーリーやプレストでの写真を交えながら紹介した。

シンポジウムに参加した医師は約200名。今回のシンポジウム開催はベラルーシ中の病院に伝えられ、全国から関心を持って集まった専門医たちである。医学再教育センターで研修を受けている学生医師も20名ほど含まれているとのことだった。会場では、配布資料を熱心に読み、報告を聞きながら熱心にペンを走らせる姿が多く見られた。質疑の時間には甲状腺疾患の術法について会場から質問が出され、武市医師が回答をする場面もあった。

内分泌科の中でも、甲状腺はさまざまなホルモンを作る極めて重要な器官の一つである。被曝が原因で、今でも甲状腺疾患の数は多い。甲状腺疾患は良性と悪性の診断が難しく、万一誤診で不要な切除手術をしてしまえば、患者は一生生涯、チロキシンなど外部からホルモン剤をとり続けなければならない。必要な量のチロキシンを摂取しなければ、新たな甲状腺異常が発生したり、腫瘍が悪性へと転化したりする。チロキシンから移転した人は農村に多く、被曝が原因の甲状腺の病気も地方に多い。1箱3ドルというチロキシンですら、彼らにとっては安くはない金額であり、病院で指示された量のチロキシンを買えない患者も多いという。



これらを防ぐためには、専門家の育成と医療機関を通じた患者への支援が重要になってくる。専門家を育て技術を伝えることは、一朝一夕にできるものではない。すぐに成果が目に見えるものはないが、地道な研修の場を増やして行くことが、大きな実りへとつながっていく。日本に比べ医療技術が遅れているベラルーシ側からは、若い医師たちの学びの場として、毎年冬の訪問に合わせた医学シンポジウム開催の要望がある。シンポジウムでも、医学再教育センター学長のホルブ氏から、医師たちの学びの機会として、専門家によるミンスクでの講義や研修を今後増やして欲しいと要望が出された。



上：シンポジウムで報告を行った武市宣雄医師
下：シンポジウムで報告に聞き入るラリサ医師、ホルブ再教育センター学長、森野善郎日本大使（前列左より）

■プレストでの第4回検診 第2世代の専門家育成

続いてプレストへ移動し、第4回目の検診を行った。プレスト州立内分泌診療所での検診には、同じ時期にウクライナのキエフにおいて国際赤十字移動検診の会議が開かれたため、残念ながらアルツール医師、ウラジミール医師の2名は参加できなかった。

今回の検診には、アルツール医師たちと同じ国際赤十字移動検診チームである、アリーナ医師とエレナ医師たちが中心的に参加した。アリーナ医師は内分泌の中でも細胞診を担当。エレナ医師は二年前にこの病院に入り、アルツール医師からエコーの研修を受けている。「現在検診に参加しているプレストの医師たちの医療技術レベルは、ベラルーシの他の病院とは比較にならないほど高いもの。私はまだ2年目ですが、できればアルツール医師たちのようにエコー・吸引穿刺・細胞診



吸引穿刺を行う清水医師（中央）とそれを見つめる賀来さん（左）。エレーナ医師が患者に声をかける。

と総合的な技術を身につけた専門家になりたい」と語る。日本とベラルーシの共同の取り組みの中で育った医師が、今度はベラルーシ国内で新たに次の第2世代を育てていく…。長い間の願いだったことが、今実現しつつあることを感じた。

プレスト検診では、24名の患者の検診を行った。女性が多かったが、中には妊娠中の若い女性や子どももいた。ガンと疑われる患者も数名見つかり、検診最終日には渡會検査技師、清水医師と現地の医師とで、細胞診結果を一人一人確認することができた。

またプレストには、日本医科大学から清水医師の教え子であるの賀来佳男さんも検診に参加した。賀来さんは、昨年夏の検診に参加していた先輩の高橋さんや江本医師の報告が学内誌に掲載されていたのを読み関心を持ち、社会勉強のためと今回自費参加を申し出てくれた。検診では、エコーや染色の手伝いを担当し、細やかで正確な作業で検診をサポートしてくれた。「現地の医療設備を見て、日本と比べて物資が不足していることに驚きました。現場での検診に参加して驚きの連続で、大きな刺激を受けました。」と話し、今後も協力できることがあれば東京で手伝いたいと話してくれた。

■ 検診を終えて

第4回検診も、大きなトラブルもなく予定通り終えることができた。また、到着初日、ベラルーシ赤十字のロマノフスキー総裁から開口一番に、今年1月にも雪だるま2号が購入できる見込みであることが伝えられた。大きな関門となっていた140万円の関税についても、人道支援目的であることが保健省に認められ、全額免除されることがやっと決ま

撤退する被災者支援と日本への期待

チエルノブイリ二〇年へ向けて

った。すでに購入計画は終わり、近いうちにドイツから車の到着時期についての知らせが届く予定であると言った。大変うれしいニュースで、ベラルーシ側、日本側双方の関係者がともに喜んだ。

一方で、支援物資として届けたエコーや顕微鏡が税関で足止めされ、再発を防ぐため今後対策を協議していく必要も感じた。税関の問題は、ベラルーシの社会情勢が厳しくなっているためでもある。人道支援物資であっても、外部からの物資持込や検査結果持ち帰りなどが以前より厳しく規制されるようになっていく。このような事情から、支援をより効率的に行うため、近年支援運動では検診器具や試薬、薬等をできる限り現地調達する方向で進めている。今回初めて現地で試薬を購入することができた。

また、支援運動の医療支援に対し、現地で多くの感謝の声を聞いた。現地医療機関や検診を受けた患者さんたちから、この活動を支える日本の良心的な市民ひとりひとりと、心からお礼の言葉をいただいた。事故から18年が過ぎ、各国からの国際支援やベラルーシ政府の被曝者支援が打ち切ら

れる中、遠く日本から着実な支援を届ける支援運動の取り組みに、現地で高い評価が寄せられている。何よりも、支援運動の会員の皆さん一人一人の支えによる医療支援活動である。現地のたくさんの方々からの感謝の言葉を伝えるとともに、活動を支え続けて下さる会員の皆さんに、事務局からも心からお礼を申し上げたい。

「チエルノブイリ20周年」という言葉がたびたび出始めている。二年後の2006年4月には、チエルノブイリ原発事故からちょうど20年を迎える。支援運動もこれを一つの節目として、現在専門家と共に取り組んでいる甲状腺ガン検診プロジェクトに関連し、チエルノブイリ原発事故による放射能被曝と甲状腺ガンとの関係についての報告をまとめる予定にしている。ベラルーシ側からもこの報告への期待は大きい。

日本とベラルーシの専門家たちの献身的な協力により、長い取り組みがやっと地に根付きつつある。チエルノブイリ事故のため今でも困難な状況にある人びとの命を救うため、引き続き支援の輪が長く広く続いていくことを願う。（運営委員・寺嶋）

ブレスト 第4回甲状腺ガン検診に参加して

日本医科大学外科学第2講座・内分泌外科

主任教授・内分泌外科部長 清水 一 雄



ベラルーシの医師たちに検査の結果について説明する清水医師。検診の精度を高めていくうえで、様々な細胞の症例について論議するこのような場は重要な意味を持つ。

ブレストにおける第4回の甲状腺癌検診に参加した。私は1999年、2000年と2年続けストリン地区の検診に参加し活動したことはあるが、ブレストは今回が初めてである。期間は11月1日、日本発、7日には帰国という短いものであった。メンバーは日本医科大学から私と、病理検査技師の渡會泰彦さんに加え、第4学年の学生、賀来佳男君が参加した。

コーディネーターで通訳の山田英雄さん、マリーナさん、事務局からは寺嶋悠さんがピチエフスクでの検診に引き続き我々とミンスクで合流する形となった。フランクフルト経由でミンスクに到着、空港ではベラルーシ赤十字のロマンノフスキー総裁の出迎えもありスムーズな入国であった。直ちにミンスク市でミロシエビッチ保健局長に面会、本活動の趣旨、経緯などを説明、挨拶を終えた後そのまま、ワゴン車に乗り込みブレスト市へ直行した。そして夕方にはブレスト市のホテルインツォーリストヘチェックインというスケジュールでその日は、早くも疲れ果てた体をベッドに横たえた。

翌、3日はいよいよ検診である。検診場所は、アルツールのお父さんが院長をしているブレスト州立内分泌診療所で院内に吹き抜け天井のある大変きれいで明るい雰囲気病院であった。久しぶりの再会を楽しみにしていたアルツール、ウラジミール両医師は会議でキエフへ出張していたため会うことが出来ずまことに残念であった。

検診はエレナさんという、女医さんが手伝ってくれて大変助かった。彼女のエコーガイド下細胞診の技術はしっかりしており、おそらくアルツールやウラジミールによく指導されたあとが伺えた。検診予定人数は、彼らが異常所見としてピックアップした10〜15人ということであったが、実際には、検診の話聞き駆けつけてきた予定外の人も加え、最終的には30人近くの患者さんの検診となった。結果は癌の疑いで手術が必要な患者さんは3名であった。

今回の検診で感じたことは、小児の受診者が減り大人が多かったことである。原発事故後18年が経過した今、事故前に生まれた人はすべて大人になっており、逆に、15歳以下の小児はチェルノブイリ原発事故を直接知らない年代となっている。この時間的経過がこのような現象となつて現れているのは避けられない事実であろうが、この事故を風化させてはいけないと感じたことも事実である。実際、大人の甲状腺癌が年毎に増加しているという事を考えると「小児甲状腺癌に対する支援」と言うより小児をはずした「チェルノブイリ原発事故後の甲状腺癌に対する」とした方が現実的であると思う。いずれにしても、今回の細胞診検査は、本学病理部の渡會さんの頑張り活躍



現地の医師による吸引穿刺を指導する清水医師。こうして技術が伝わっていく。

で、吸引細胞標本は当日染色しその場で診断までもって行き結果を出して、その結果を当地に残し帰国という理想的な支援活動を行った。この事は、当地の希望にも沿うことが出来、且つ日本側の誠意と努力を充分伝えることが出来たと考え今後の活動に有意義であったと考えている。

ミンスク市でミロシエビッチ保健局長との面談の中で今後の活動について日本側との覚書を交わしたいとの話が出たと記憶しているが、私は、今後、私の所属する日本医科大学との正式な相互の覚書の元に活動が続けられれば、学生を連れて行くことも日本医科大学の医学部学生の教育の一環として捉えることができ、この活動が私をはじめ、日本医科大学第2外科の公式行事として捉えることができ、私自身は定年退官までのライフワークとして捉え、更にこの活動を活性化させていけるものと考えている。

最後に、今回の検診の道中お世話になった事務局の寺嶋悠さん、大変お疲れ様でした。また、ありがとうございました。

臨床検査技師の仕事

現地で全て結果を出す

大変で大切な仕事



顕微鏡で細胞の状態を確認する渡會臨床検査技師。短期間のうちに診断を出し、その結果を現地の患者に伝えるため、その仕事は多忙を極める。

私は、臨床検査技師（細胞検査士）として、昨年の7月に行われた第3回ブレスト甲状腺癌検診に引き続き今年10月～11月に行われた第4回検診に参加し、同行した医師らと共に甲状腺癌検診の中でも最も重要な細胞診断（文字通り細胞を見て病気を診断する検査）を行ってきました。

細胞診断とは、超音波検査や触診にて発見された、甲状腺のしこり（専門用語では腫瘍）に細い注射針を刺して甲状腺の細胞を採取し、悪性の癌か良性の病気を判断する検査で、細胞診断の中でも穿刺吸引細胞診と呼ばれます。

この検査は普通の注射と同じ細い針を使用しますので、患者様の痛みも、その後の後遺症も少ない優れたもので、乳房のしこりや唾液腺の検査として、知っておられる方がいるかもしれません。（詳しくは 細胞検査士会ホームページ<http://www.cjis.sc.com/>）

昨年の検診では85名中9名（約11%）に、今年は24名中3名（約13%）に甲状腺癌が発見されました。その後、現地医療機関

で再確認され治療が施されることになっております。その他にも癌の可能性がある方が昨年15名（約18%）今年2名（約8%）見つかり、再検査を経て治療方針が決まることになると思われます。

この癌の比率は、日本での一般診療に比べ高い陽性率ですが、これはブレストでの現地医師による移動検診にて、リスクの高い人を選別できている証明であり、現地の検診技術が支援により高まっている証拠と考えられます。

今年は、特にベラルーシ共和国が血液や細胞診標本のサンプルの持ち出しを厳しく制限してきたこともあり、現地ですべて結果を出す必要性がありました。

1日半という短いブレストでの滞在時間に追われ心配でしたが、何とか結果を残すことができ、大役を終えた充実感で今は一杯です。おかげで現地でのウオッカがおいしいのなんのつて？ きついスケジュールながらもブレスト要塞の見学もでき、現地スタッフとの交流会でお互いに心を開いて語り合うことができました。

検診の中で感じたこと

私たちがミンスク空港を降り立つと、ロマノフスキー赤十字代表が迎えてくれました。おかげで私たち一行はVIP扱いで、入国審査を経ないで、一般とは別の通路を通り直接入国することができました。この場面を感じたことは、いかにチェルノブイリ支援運動・九州の支援が、ベラルーシの人々の健康を守るために貢献してきたかであり、それにより国の機関が積極的に支援してくれるまでになったことでもあります。

それまでに支援運動の方のご苦労と困難があったことは、過去の通信など見ることでより知ることができます。私たちは、そのレールの上に乗るスムーズに検診を行うことができました。

私はブレストの前に行われていたストリン地区の検診の様子として、ポロポロの医療機関や、屋外パーティーでまだ放射能が残っていると思われる川でとれた魚を食べた思い出など聞いていたので、ブレストでの検診では洗練された綺麗な病院や

レストランでの食事に大きな格差を感じました。

ストーリーンの田舎とブレストという都会の違いはあっても、その間の経済成長も大きいのだと通訳兼医療コーディネーターの山田さんに聞きました。

しかし、経済成長があり、チェルノブイリ原発事故後18年を経た今でも、住民に対する事故の影響が無くなったわけではありません。

最近、小児甲状腺癌が変わって18歳前後の思春期年代の甲状腺癌が増えているそうです。これはちょうど事故当時に生まれたかその後の子どもたちであり、若者が甲状腺癌などの病気に侵されることは国家として大きな脅威であります。

事故後18年が過ぎ、日本でも新聞などで一区切りがついたよう

な報道が多かったようですが、実は違います。現に外務省ホームページ渡航情報では、原発に近いベラルーシ南東部では「十分注意してください」となっております。

ところが、年数を経たことにより各国の支援活動も引き上げる動きが顕著になっており、チェルノブイリ支援運動・九州に求められる期待と役割の重要さはますます高くなると考えられます。

そういう私も、今回の検診に参加するまで、事故の事は忘れており、現地の人々の苦しみ悲しみを知る機会もありませんでした。

そして、原発の発生する電力でぬくぬく暮らしている一市民であり、安全に運用する限り原発反対というわけでもありませんし、ベラルーシの人々もまたロシアより購入する原発の電力で生活をしております。

しかし、現状を目の当たりにし、人々との交流も深めた今は、この検診を私に与えられた人としての使命と考え、これからは支援運動に微力ながらもお手伝いできたらと考えております。



2回目の検診参加 三本亜希さんの検診報告



臨床検査技師としてベラルーシでの検診に参加した三本さん

2年ぶりのベラルーシでした。またベラルーシ検診に参加することができ、みんなに会えるのがとても楽しみでした。前回の検診では、海外検診そのものが初めてで、何をしたいのかさっぱり分からず、戸惑いの連続でしたが、この2年の間にウクライナ検診、カザフスタン検診と海外検診に参加する機会に恵まれて経験を積むことができました。日常業務をこなしながら海外検診の準備をするのはいつも大変ですが、最近では気持ちに余裕が持てるようになりました。

今回はピテフスクでの検診を行いました。小さな村の小さな病院を想像していたのですがけっこう大きな街で病院も立派でした。設備も道具も揃っている感じでした。

検診は順調に進みました。アルツールさんやウラジールさんなどブレスト検診チームは移動検診に慣れているようで、準備の手際がよく、その後の問診、採血、採尿、触診エコーと、ピテフスクの病院のスタッフとも協力して行いました。

今回の検診ではブレスト検診チームが使っているエコーを借りて行いました。そのエコーは2年前にチェルノブイリ支援運動・九州から贈呈されたものです。ボタンの押しすぎで文字盤の文字は消え、使い込まれているのが一目瞭然でした。支援したものが有効に使われているのを見るのはうれしいものです。

検診は人と人との出会いの場でもあります。現地スタッフとの交流はもちろんなのですが、日本人スタッフとの出会いもありました。今回リクエストしていたアルコールや染色液が手に入らないというトラブルが生じ、私たちと入れ替わりでブレスト検診を行う日本医科大学の渡會さんと国際電話でやりとりをすることになりました。これを機に友好的な関係が続けばいいなと思います。

私たちが検診を行うためにベラルーシ赤十字のロマンノフスキー総裁をはじめ現地の方やコーディネーターの方が何ヶ月も前から大変な思いをして準備してくださっていることを今回初めて知りました。ベラルーシは政情が変わり、さらに状況が厳しくなっているようです。ロマンノフスキー総裁が頭を抱えながら、それでも検診を行うために全力を尽くしますとおっしゃっていたのが心に残っています。チェルノブイリ支援運動・九州の事務局を中心として、いろんな方々に支えられて私たちは検診を行うことができます。今回、検診に参加させていただき、事務局には大変感謝しています。今後、病気で苦しんでいる方々から一人でも多くの方に笑顔を取り戻してもらいたい。そのためにも今後も検診が続いていくことを願っております。

医学生がみたチェルノブイリの検診活動

賀来佳男さんの感想



今回の検診に同行した医学生の賀来さん。検診の現場でも助手として関わり、検診活動に協力してくれた。

きっかけは大学の学内向け広報誌に載っていたひとつの記事だった。その記事は2003年の移動検診に参加した江本直也先生の報告文で、タイトルは「チェルノブイリ原発事故後甲状腺検診」だった。

チェルノブイリの原発事故を、僕はすっかり過去の出来事として捉えていて、その記事を読んで初めて、多くの人々が現在進行形で甲状腺癌を患っていることを知ったのだ。被災した人々にとって、チェルノブイリの原発事故は何十年経とうと過去形で語ることはできないに違いない。いくら人々の記憶から、僕の記憶から消え失せようとしていたとしても。

かつて読んだ受験参考書の一節を思い出した。「原子炉ではエネルギーを取り出しても）核子の総数は変わらず、それらが放射性原子核として残され、原子炉を運転すればするほど危険な放射性廃棄物が生み出され、そのつけを子々孫々に残すことになる」（山本義隆『物理入門』。ベラーシには、まさにそのつけを背負っている人々がい

る。関心が徐々に高まり、現場に行きたいと思い今回の検診に加わらせてもらった。

1週間の行程のうち、ベラーシに滞在したのは3泊のみ。検診活動はたった1日半だったが、いろいろなことを見聞きできた。

ブレストの州立病院内にあった病理診断用の顕微鏡が、州立病院にある唯一の病理診断用の顕微鏡であることに驚いた。僕が通う大学の実習室に、学生用として100数台ある顕微鏡が、ここでは一つしかない。

そして廊下で細胞診の順番を待つ人々の不安そうな顔も印象的だった。甲状腺の穿刺吸引が終わったとたん泣き出した若い女性もいた。原発事故が人々に与えた不安や恐怖を一瞬でも垣間見た気がする。

もつぱら研究データの収集を目的とする検診を行い、治療はおろか検診結果すら教えずに帰国してしまう「支援」団体が少なくなく、そのために検診活動が人々から不信感を抱かれはじめていること、また政府によって検体の持ち出しが禁じられたことも知った。こういった御利用主義的、業績至上主義的な活動は決して許されるべきではない。そういった団体がいる一方で、移動検診を軌道にのせるため・継続させるために努力された方々には敬意を感じずにはいられない。

検診とは直接関係ないのだが、帰りに一泊だけした首都ミンスクの美しい街並が忘れがたかった。そして車の窓から眺めた、果てしなく続く白樺の木々も夢のように美しかった。曇り空の下のミンスクの街並や白樺の森は、いくぶん乳白色にかすみ、まさに白ロシアという感じだった。出発前、そして道中多くの方々にお世話になりました。この場を借りて、感謝の意を表します。今後も支援に関わって行きたいと思えます。

リュドミラ・ウクラインカさんが結婚されました。そして、4月にはお母さんに



今年結婚したリュドミラ・ウクラインカさん

これまで2回に渡って来日し、会員の皆さんにも馴染みの深いリュドミラ・ウクラインカさんが結婚されました。その後、来年の4月には赤ちゃんが生まれる予定というさらに嬉しい知らせが届きました。

チェルノブイリ支援運動・九州が彼女と出会ってから7年が過ぎますが、当時から「自分も同じ病を患った経験を生かして、甲状腺の病を患う子どもたちの心のケアに取り組みたい」と話してしていました。その間、心理学者としてのキャリア積み重ね、そして今、新たな幸せを手にしたリュドミラさん。今後の活動に期待したいと思います。

会員の皆さんからのカンパへのお礼のメッセージが届きました。

ナターシャさんからのメッセージ

親愛なる日本人の友人の皆様へ



工房のぞみ21のナターシャさん

私はこうして手紙を皆さんに送ることができ
て、大変嬉しく思っています。
つい最近、私はみなさんに対してお願いを送
りました(通信59号参照)。工房にはいろいろな
問題があります。年月が経つにつれ、生き残る
のがだんだんと難しくなっています。身体
障害者が働いているところではいつも何かと問
題が起ります。

我々の工房は自分たちで稼いでいるお金だけ
で存在しています。物を作って、それを売って
自分たち自身の消費をまかさないです。給料も含
めて。物が売れば、その分の税金を支払わな
ければなりません。また、たとえ作った物が売
れなくても、作った物には税金が課せられるの

です。

最近、問題が重なってきました。けれども、
皆さんから寄せられたお金のおかげで、わたし
たちはたくさんの問題を解決できて、これから
も工房は仕事を続けることになりました。

皆さん、もうすぐ冬がきます。この冬は大
変寒いです。皆さんから寄せられたお金のおか
げで、わたしたちは家賃と工房のために払う賃
借代と暖房代を払うことができます。暖房代は
特に問題になりました。ここは暖房を6ヶ月分
払わないといけません。皆さんの寄付のおかげ
で、わたしたちは今年、この問題を解決でき
ると思います。

わたしの子どもたちはこんなにきれいな物を
作っています。心を込めて作っています。皆さ
んに買ってもらうように努力しています。皆
さんがわたしたちの商品を買ったときに、どうぞ
わたしの子どもたちを思い出して下さい。

そして、1つ忘れないで下さい。それを作っ
ている人々は、チェルノブイリの被害も含めた
様々な理由で、体に障害や問題を持っているの
です。

わたしは、わたしの子どもたちからの「よろ
しく」を伝えたいです。子どもたちに代わって
「ありがとう」を言いたいです。みなさんからは
いろんな支援をして頂いて、本当にありがとう
ございました。

みなさんの健康と幸せを祈っています。

ベラルーシの民芸品の数々 のぞみ21より、新作入荷!!

被災者と障害を持つ若者たちの福祉工房”のぞみ21”より、作品を入荷してきました。



のぞみ21の作品の購入にお問合せは、チェルノブイリ支援運動事務所まで
電話/093-203-5282

あるウクライナ人との出会い

チェルノブイリの他にもできること

文・吉本美貴（チェルノブイリ支援運動・九州事務局）

日々、チェルノブイリへの支援というテーマと向き合いその実務を担うチェルノブイリ支援運動・九州の事務局。多種多様な仕事をしていくなかで、ときに思いも寄らないところから、不思議な出会いを得ることが・・・。



コンスタンさんと病室にて

『ロシア語を話せる人はいませんか？ウクライナの患者さんが入院しているのですが、経過も詳しく説明できないし、食欲もなくて心配です。』10月末、北九州市の病院に勤める看護師さんからの問い合わせが、伝え伝えチェルノブイリ支援運動・九州事務局まで回ってきました。早速、運営委員の山口さんに連絡を取って見たところ、山口さんは早く引き受けて、次の日曜日に大分から北九州市まで足を運んでくれました。どうやらその患者さんと意気投合した山口さんは、「またお見舞いに行くので吉本さんも一緒に行きませんか？」とのこと。そこで、山口さんと一緒に黒パンとオイルサーディンを持って、病院に行きました。

病院には、大きな身体をきゆうきゆうにしてベッドに横たえているコンスタン・サベンコフさんがいました。ショートネームはコンスタンさん。38歳で、船乗りです。仕事でたくさん国に行くけれども、日本に来たのは初めてだそうです。そして初めての日本で15メートルの高さから転落し、入院することになってしまいました。他の乗組員はその後ウクライナに戻り、山口さんが来るまでの3ヶ月の間、1度もロシア語を使う機会はありませんでした。痛みと不安と孤独で日本のイメージは悪くなってしまったのでは？ と思いましたが、コンスタンさんは、「そんなことはない。日本の医療にも満足している。」そして、「数ヶ所骨折したけれど、内臓は何ともなくてラッキーだった。」と言いました。穏やかで、強い人です。11月5日、事務局では次回のベラルーシ料理会に向けて、福祉工房「のぞみ21」のナターシャさんから教えてもらったレシピをもとにベラルーシ料理を試作することになったので、「でき上がったら、きつと持って来ますね。」と約束して、病院を後にしました。

そして、私は約束通りボルシチ、ブリニ、マチャンカなど、でき上がった料理を持って再びコンスタンさんのところに行きました。本当は、ロシア語ができない私は、山口さんなしで行くことに大きなためらいがあったのですが、「彼はとても楽しみにしていましたよ」という山口さんからのメールに後押しされて、病室まで辿りつくことができました。コンスタンさんは穏やかな笑顔で迎えてくれて、病院の夕食をすませた後でしたがモリモリ食べました。そして、「これはちよつと違うけど似ている」、「これは奥さんが作るのと同じ味がする」、「これは塩が足りない」と、ひとつひとつに評価してくれました。コンスタンさんは英語も上手にしゃべります。わたしの英語の力では、半分くらいしか理解できませんでしたが、それでも、その後も何度かお見舞いに行きました。いつも笑顔で迎えてくれ、ウクライナのことや家族の話をしてくれました。11月中旬、コンスタンさんは退院していききました。最後にお見舞いに行った日、それまではやっぱり強がっていたんだなと思えるような「病院はもういい。ウクライナに戻ったらもう絶対に病院には入らない。それに日本の枕は小さくて固い。」といったグチもきくことができました。そして「帰ったら奥さんにしかられる。」と言いつつも、とつてもうれしそうなコンスタンさんでした。

第3回 ベラルーシについて学んでみよう

チエルノブイリ支援運動・九州 運営委員・ロシア語通訳
山口 英文

さて、いよいよ中世から近代へと歴史は進みます。近代の歴史は現在に直結する影響力を持っていてそれは世界のどの国にも当てはまる普遍的な現象です。大まかに言うところロシア・ベラルーシ・ウクライナは中世を境にそれまでのルーシやモンゴル帝国の影響から脱してロシア独自の発展の歴史を刻んで行きます。ポイントは「タタールのくびき」の終焉から始まりません。

このタタールのくびきと呼ばれる時代は1240年から1480年まで続きます。日本では北条氏の鎌倉執権政治から室町時代の応仁の乱の時代に相当します。この時代はロシアに二つの流れが生まれました。当時、ドイツ・スウェーデン等の当時のカトリック教国は、東のロシア正教とモンゴル帝国の未裔を異教徒として駆逐しようという動きがありました。それに対しては内部からその勢力と呼応してモンゴル人からの解放と独立を目指す勢力。もうひとつは逆にモンゴル人と連合して、西欧諸国の侵略からロシアを守ろうとする勢力です。

ロシアの英雄として名高いアレクサンドル・ネフスキーは1240年に当時の大國で先進国であるスウェーデン軍を破り、1242年にはドイツ騎士団を凍結し

たチュード湖で打ち破ります。彼の名は今もロシア人の中には輝かしい英雄と強國への勝利として記憶されています。現在のペテルブルグを流れるあの美しいネバ川は彼のネフスキーという名にもなったのです。このネフスキーに代表されるのが、直接モンゴルの支配を受けなかった北東ロシアのノブゴロド、リガ等のバルト海諸國とその周辺の諸侯です。彼等は直接にはキエフ・ルーシの諸侯ではありませんが、南のベラルーシ、ウクライナ付近はキプチャク・ハン國の直接支配であり、キエフを中心とするキエフ・ルーシは衰える結果となります。それに対して北東ロシアの諸侯は水路を利用した中継貿易でバルト海に面する交易によって栄えます。そしてキプチャク・ハン國の支配を終わらせる指導者がモスクワとともに歴史に登場します。ネフスキーの孫、ユーリーはキプチャク・ハンの妹を妻にして大公の称号を得てそれまで一城砦でしかなかったモスクワを確固とした立場にします。そして、ネフスキーの血を引くドミトリー・ドンスコイがロシア諸公の連合軍を組織してドン川のほとりのクリコボという場所で不敗と信じられていたモンゴルの騎馬隊をはじめ破ります。その後モンゴルもモスクワを占領したり反撃に出ますがド

ンスコイの実力を認めて正式にルーシの大公として認め、ドンスコイの孫であるイワン3世はキプチャク・ハン國によって貢物の中止と承認を得ずに大公を承継して、1480年にキプチャク・ハン國の支配をしりぞけました。

イワン3世はオスマントルコに滅ぼされたビザンチン帝國の亡命した王女ソフィアを妻にし、ローマ帝國の承継者であり、今、テレビでロシア大統領の背後に見られる双頭の鷲の紋章を使用しはじめました。つまり、モスクワは第3のローマであり、ロシアはキリスト教化したローマ帝國の承継する國であるという事なのです。さらにイワン3世は北東のノブゴロドの諸侯を打ち破りあるいは服属させてモスクワ公國に従えつづけ、衰えたキプチャク・ハン國からベラルーシやウクライナを取り返しモスクワを中心とする今のロシアの礎を築きあげました。一方キプチャク・ハン國自体はモンゴル人主体の國からトルコ系のタタール人の影響を受け、14世紀には完全にイスラム教國に変化しさらに最後はクリミア・アストラハン・カザンという現在にもロシアに名を残す3つの國に分裂していきます。そしてこれらは現代もこの時代にさかのぼる複雑な民族紛争の背景になっていますが、後にこの問題に触れます。

このイワン3世によってモスクワに統一されたノブゴロドを中心とする地方は、商業によって栄えた地方で市民会議や族長の選挙などキエフ・ルーシで見られた

ような、中世の民主制度が特徴ある市民社会であり、この雰囲気はベラルーシを旅したら触れられる活発で陽気なコミュニティケーションとバザールでのロシア・ウクライナ・ベラルーシの人々の人懐こいけどなかなか上手な商売の祖先であるかも知れません。

しかし、ここでちょっと注意して欲しいのは彼らの歴史は西のヨーロッパ・北欧・東からのモンゴル人等との影響を排除するために様々な戦いや駆け引きに明け暮れたという事です。豊かな水路とそれによる活発な交流や、水路周辺では農業も栄え國が育ち始めるとその富を狙って異民族がおしかけるという経験です。そしてその異民族に対抗するに当っては強い政治指導者が必要とし、またそれがなくては彼らの國が出来ないというジレンマです。旧ソ連・そしてロシアにおいて強権的な國家と政治体制がしばしば非難されますが、そうまでしないと國を維持していけなかった彼らの歴史の苦労について我々が理解しておくことが正しい認識につながるかも知れません。

今回は、中世と近代へのターニングポイントとなったモスクワ・ロシアの出發とその出現をもたらしたわが國にも馴染み深いモンゴル帝國というものを中心に述べましたが、次回は近代への曙として歴史に名をとどめるイワン4世Ⅱイワン雷帝の登場とそれからのロシアという事に進んでみたいと思います。

歴史の旅は中世から近代へ

全てのことは、つながっている

チェルノブイリ支援運動・九州の実習で学んだこと



阿部千種

(福岡教育大学の学生。今年6月にチェルノブイリ支援運動・九州の方で2週間の実習に取り組み、事務局の活動に参加。)

私が今回の実習で任された仕事は、「小・中学生向けの資料作り」でした。原発事故が起きた当時、まだ2歳だった私は、この資料作りから、チェルノブイリについての勉強を始めました。私は「食と農」に関心を持っていて、ということもあり、この資料を作る上で、食物連鎖による放射能の生物濃縮に関心を持ちました。食物連鎖とは、食べる・食べられるという関係から成り立つ食物間の連鎖関係です。その食物連鎖と生物濃縮は切っても切れない関係にあり、食物連鎖の上に行くほど、生物内の化学物質の濃度は上がります。また、生物濃縮が起きるのは、取り込まれた物質を分解や排出できない場合か、排泄するよりも取り込む量が多い場合です。

は高濃度になっていきます。しかも、牛は牧草を1日約10キロも食べ、牛に蓄積されその一部が毎日牛乳に移行しています。そのような経緯でできた牛乳を子どもが飲むことになり、それがとても危険なことです。しかも甲状腺は大人でも両側合わせて20グラムくらいで非常に小さな器官で、小学生だと4グラム以下になります。その甲状腺に大人と同じ量のヨウ素を子どもが取り込むと大人に比べて5倍の濃度のヨウ素を取り込むことになり、それは子どもたちが大人の5倍も被曝をしたことを意味します。これはヨウ素だけに言えることではありません。子どもは体が小さく、また成長するため多くの栄養を取り込むので、非常に放射能の影響を受けやすいのです。そして胎児は、母親で放射能の濃縮がかかるのもっと大きな被害を受けます。生物濃縮は放射能の被害を次世代まで残す恐ろしいシステムなのです。

私は、食物連鎖による生物濃縮について考えることを通して、全てのこととはつながっていることを感じました。自分とは関係のないことなんて何ひとつないのです。原発という自然界に今までなかったものを作ったら、今まで多くなかった甲状腺ガンや白血病の危険性が出てきました。全てのこととはつながっているから、自分たちに還元してくるのだと言うことができるのではないのでしょうか。

小山先生のチェルノブイリ報告に寄せて



報告会でベラルーシの様子を伝える小山浩一さん



ベラルーシの民族衣装を試着する小山さんの教え子

小山浩一さんは、小学校の先生である。

鮮やかな秋天の一日、大分県の日田市で行われた小山さんによるチェルノブイリ報告会では、小山さんの日々の活動の全体像に触れることができ

た。その報告を聞き終え、翌日、中津江小学校で教え子に語りかける小山さんを見て私に残った想いはひとつだけ。「小学生のときに、こんな先生に会いたかった」である。

「生命そのものを子どもたちに伝えたい」と小山さんは言う。生命そのものを伝える、それは実際に障害を負いながら生きている水俣の人と共に過ごすことであり、あるいは数多のゴミが不法に投棄される産廃の現場を子どもたちと目の当たりにすることであり、さらにはプロの演奏家の音に直接に触れることだ。つまり「本物に触れる」こと。

「こと。そうした活動の延長線上に、この夏の、小山さんにとってのチェルノブイリ訪問がある。

その体験を、子どもたちに伝え、共有する。いずれ小山さんはチェルノブイリの人と子どもたちの出会いの場を作るだろう。小山さんが設定する様々な人、場所との遭遇によって、子どもたちは生命なるものに対する感性を培っていく。それが、平和の花を咲かせる種ではないか。

「平和は子どもから生まれます」、これはある講演で耳にして以来、私がかつてもなく繰り返す言葉である。しかし一番確実な平和への答え、もしくは道筋だと思ふ。

教師としてその道を進む小山さんには力強さを、それに聞き入る子どもたちの姿には未来への希望と幾分かの羨ましさを、私は感じていた。そのとき得た印象を、私はチェルノブイリと関わる動機のなかに組み込んでいきたいと思ひ、そして気づくのだ。小山さんは子どもたちだけでなく、私にも語りかけ、今後のチェルノブイリ支援活動の新たな可能性と視点を提示してくれていたのだ。

さすが、先生である。

チェルノブイリ支援運動・九州
代表 矢野 宏和



事故後、プリピヤチ市に代わって原発労働者の町となったのは、スラヴィツチ市である。

チエルノブイリとスラヴィツチは、『復活』と名づけられた新しい通勤列車で結ばれている。「感動したね、この名前に。がんばってんな、って。」

チエルノブイリ原発のすぐそばにある駅名は、セミホーディ駅という。これは、皮肉なことに『早く歩く、逃げなさい』という意味を持つ。この駅のホーム近くに並ぶのは、まるで電話ボックスのような放射能測定機。「両手でハンドルみたいなのを持って、手で測定する。どれくらい放射性物質があるかって。プールのランプがいたら、これがガチャって開くわけ。」

働いて帰ってくる人たちは毎日、被爆していないかどうかを確認して家路へとつく。それが、日課なのだ。

このスラヴィツチで、手島さんは高校の卒業式に遭遇した。ここでは、卒業する子ども達が町をパレードし、過去の英雄達のモノコメントに献花するのがしきたりだ。ここで言う『英雄』とは、チエルノブイリ事故の消火活動にあたった27人の消防士たちのこと。少しはにかんだ、でも誇らしげな表情でパレードをする18歳の子ども達。この子ども達が3歳の時に、事故は起こった。手島さんが、写真の中のひとりの少女を

スラヴィツチ・・・復活!

指さした。「この子は、風車を3歳のころ気に入ってた。でも強制避難でプリピヤチに置いてきたんだって。今でも風車をさがしてる夢をみると言ってるよ。『持ってくればよかった』って。」

翌日、プリピヤチ出身の子だけが里帰りできる。30分だけの里帰り。手島さんは、それに同行した。驚いたことに、ここで行われたのは就職説明会だった。説明するのは「原発の所長」。卒業生からは、「本当に雇ってくれますか?」という質問などが出た。「不思議だよ、原発事故でそんな目にあつたのに、まだそうやって仕事をしたって。貧しくて仕事もないんで、仕事だったらどこでもやるんだっていののが、今のウクライナの人たち。」

日本から『チエルノブイリ事故の被災地』を見れば、「かわいそうに」とか「そんなところにいたくないでしょう」

「原発なんて見たくもないでしょう」と当然のように思いがちだろう。しかしここには、今も確実に生活が存在している。毎日の暮しを営む人々がいる。矛盾とともに、しっかりと生きていくのだ。それは、ウクライナやベラルーシの人たちが特別なのではない。

わたしたちはみんな、毎日を生きているのに、いったいどれだけの矛盾を抱えているだろうか。



廃墟にのこされた子どもの写真

写真展の展示は、3つの教室に分かれていた。最後の写真の部屋に入ると、それまでのささやきかけるようなモノクロのトーンとは違って変わって、急に明るいカラーになった。写っているのはスラヴィッチの子ども、子ども、子ども。スラヴィッチの人口は2万6千人。そのうち、16歳以下が1万人もいるという。そのうちひとつの写真に目をやるとその横には「21世紀の町」という文字。思わずわたしは、「どういう意味で「21世紀の町」と書かれたのですか？」とたずねた。今も放射能が満ちる空気、廃墟になつたいくつもの村や町、その中で亡くなつたり、病気を抱えたり、家族を失つたりした人達、夢の中でしかふるさとに帰ることのできない人達……。そんな中で、21世紀の町という言葉がすぐにはピンとこなかった。「日本で子供を見るのむずかしいでしょ？でもスラヴィッチにはうようよいから、こりやあすこいなあつて。今からの国ですよ、ウクライナは。」手島さんの目がきらきらと力をおびていた。

その言葉と、手島さんの目にはつとめた。わたし自身、小さいころにニュースで見たチェルノブイリを、長い間『絶望』の灰色のイメージの中に置いていた。しかし、実際にベラルーシに行き、そこにいる人々と出会い、美しい自然に取り巻かれた瞬間に、そのイメージが一気に吹き飛び生き生きとした『カラーの世界』になつた感覚を思い出した。「21世紀の町」と迷いなく断言する手

21世紀の町の子どもたち

鳥さんは、現地の人々の生きている姿に触れ、そこに暮らす人々から未来を感じ取ったのだろう。その実感が、この部屋いっぱいの子どもたちのカラー写真にこめられている。よく思うことだが、わたしたちは「支援」をしていると言うが、実際のところ希望をもらうのは、わたしたちのほうだ。部屋いっぱいの子どもたちが、わたしの心にあたたかい光をともした。

「ぼく悩んでねえ、ぼくに何ができるのかなあ、つて。写真展はできるけど、でもそんなのは……」そこで手島さんは、リユーマチ系の病気を患い、成長も遅い1人の少年の応援をすることにした。「よし、まず一人の人から応援してこうつて、一人の間も応援できないのにそんな数十人、数百人応援できないつて思つて。彼を応援していこうつてことで、募金を呼びかけて、彼とスラヴィッチの教育委員会に寄付するんだ。」

そして、手島さんは語りかける。「私達の住む日本は原発大国です。核、放射能の危険と、常に隣り合わせで生きている。安全感覚の麻痺。油断は人類を必ず破滅の道へと誘うことを生命に刻みつつ！

『ヒロシマ、ナガサキ、そしてチェルノブイリ』。

『さあ、みんなで考えよう！』と。」

(取材・文 谷口 恵)



手島雅弘 (Teshima Masahiro)

株式会社スタジオクリエイションプラン 代表取締役
スタジオキャパ 代表
JPS (日本写真家協会) 会員

1951年 福岡県生まれ
1972年 東京総合写真専門学校卒業
(株)電通本社 写真部にアシスタントとして従事
1975年 独立 フリーとなる
1982年 スタジオクリエイションプラン設立
1996年 シルク・ドゥ・ソレイユ「アレグリア」写真展を「GAYA」、「ホテルシーホーク」にて開催
1997年 スタジオキャパ設立
1999年 「光の中の日本」The Heart of Japan 出品
2003年 「柳川華恋」平野紘子 パンフラワー作品集撮影 (西日本新聞社刊)



光にあふれる部屋に、スラヴィッチの子どもの写真は展示されていた。

たむけの集まり

おとなの集まり

(敬称略・順不同)

林昌子 小島輝巳 山本友美 遠藤礼子 福田昌佳 Steven Sabotta 江越知佳子 西原幸子 江口由美 松本竜子 松本慈照 松原禮子 中島俊子 サトウ矯正歯科クリニック 松田正憲 (医) くまがい産婦人科理事長熊谷淳二 松尾博文 財津悠子 古里美津子 水落靖子 鳥原良子 川越千世 医療法人かどもと眼科医院 加登本 田口美恵 丸山和成 植村仁美 水木啓誌 前田・渡辺・中西・沖 合馬晶子 富田明美 山内秀子 須崎海里 梶島一郎 上原康央 赤木沙彦子 小西功子 伊藤陽子 保元内科クリニック 横井美佐子 梶原克彦 深堀ミチ子 山崎喜代美 小糸ファミリー 古川玲子 西尾麗子 関根涼子 岩本美恵子 酒井淑江 吉中澄子 跡部秀之 松尾美佐子 池田みどり 榎本みつ枝 桜木秩子 黒川富秋 岩口香織 本田スミ子 貴田典子 野口千恵子 水木啓介 池田阿里 本多直純 本多いずみ 小麦畑 塩田万希世 添田恵 小早川稔子 特定非営利活動法人BHNテレコム支援協議会 西成辰雄 大屋さだ江 日高太 山口幸子 桑村綾美 小澤聖 植野友佳子 福山知恵子 高山幸子 三上鍊子 入濱祥子 金田美香 高藤富美子 田村栄子 飯屋崎寛子 松田久美子 加治木朋子 石橋芳子 森本真希 水車むら農園 新井不動産販売株 グリーンコープ生活協同組合おいた 力丸邦子 渚レディースクリニック 澤田和子 三本和 一木八千子 大友慶次 松本弘子 筑豊互

助会 八代女性市民の会トマト館 じゃがいもの
おうち グリーンコープ生活協同組合くまもと

(二〇〇四年九月一日より十一月三〇日まで)に募
金をして下さった方、ならびに「のぞみ21」民芸
品、チエルノブイリ支援コーヒー・紅茶の購入を通
して活動を支援して下さいました。通信にお名
前を紹介することを、ご許可いただいた方のみ掲載
しています。

募金額内訳

三千円コース 二九三、〇〇〇円 (九九件)
五千円コース 八〇、〇〇〇円 (二六件)
一万円コース 一六〇、〇〇〇円 (二四件)
「雪だるま2号」カンパ 二〇、六八八円 (四件)
その他カンパ 四一四、三三四円 (六七件)
(分割払いの方もいるので数字は割り切れていま
せん。)

合計 九六八、〇一二円

★チエルノブイリ調査隊派遣には、「通販生活」読
者の皆様より、医薬品・医療機器購入のための
補助金、雪だるま2号維持費として、七二二、六
四〇円のカンパをいただきました。

★株式会社カタログハウスより、三五〇万円の活
動支援募金をいただきました。

★「プレストにおける第4回検診」には、「通販生
活」読者の皆様より、エコーおよび顕微鏡の購
入費として、二、八九九、〇五〇円のカンパをい
ただきました。

また、成和産業株式会社、および武藤化学薬品
株式会社より、検診機器・試薬の調達、輸出にあ
たり、多大なご支援、ご協力をいただきました。

募金者からのメッセージ 一部抜粋

●お便り読んでます。一助となればと送ります。●これからも応援してい
きたいと思えます。●少しばかりですが、チエルノブイリの子どもたちの役に
立つことを願っています。●お便り読んでいます。●心ばかりの応
援ですがどうぞ受け取って下さい。●原発なんていらぬ。●道遠く未だ走
れず。140万の達成が一日も早からんことを。●年金暮し、少しですが、
分割払いとします。●雪だるま2号が一日でも早く走れます様に。御役立て
下さい。●飯塚市で人形劇&パフォーマンスをしていた宮本さん(パベット
BOX)と一緒に硬貨を集めました。缶一杯になったので送ります。色んな
人に協力して頂きました。●何かのお役にたてれば幸いです。(わずかです
が)●Good Luck●少しでもお役に立てば幸いです。●チエルノ
ブイリのごことは明日の日本のことかも知れません。●通信のおかげで「命」
を見直す時間があります。●快復を祈ると共に原発が無くなるよう願いま
す。●(アレクセイコーヒーセットを)さっそく送って頂いてありがとうございます。
●(チエルノブイリ支援コーヒー)少しの注文ですみません。飲んでしまつたらまた
注文します。●いつも通信を送付いただきありがとうございます。ほんのわ
ずかですが、バイト料が入りました。●わずかですが、お役立て下さい。●
祈りながら頂きます。おしい紅茶です。●10月末のチエルノブイリへの治
療ボランティアチームに、私が今、お世話になつていてる武市先生が行かれ
ます。感謝を込め、祈っています。●通信をいつもありがとうございます。
●雪だるま2号が早く走れますように!●いつもご支援活動をご苦労さま
です。●雪だるま2号が一日も早く走れますように。●お疲れさまです。さ
さやかですがおくりします。●少しでもお役に立てれば、うれしいです。
●皆様のお働きに敬意を表します。●ゆきだるま2号が早く活動が開始できる事を願っ
ております。●微力ながら手助けになればと思えます。スタッフの活動支援
に感謝しております。●ナターシャさんの手紙は胸が痛みます。●活動14
年、NL3000部というのは、本当に色んな人たちの力が生みだす日々の
運動の結果だと思います!●お手数をおかけしましたが、さっそく送ってい
ただきありがとうございます。●コーヒーを飲んで支援できるのもうれし
いですね。●子どもが絵本で「マトリョーシカ人形」を知り、インターネット
を通じて購入しました。人形と共に、チエルノブイリのことについても親子
で考えたいと思えました。●わずかですが、子供たちの笑顔につながります
ように!●東京の西に浜原原発。東海地震震源域です。チエルノブイリは身
近にあります。●めまぐるしく変わる世相の中であつて、「うます、たゆまず」
まさにこの言葉のようなベラルーシへの活動。本来の支援の姿と感服してい
ます。今後に期待しています。●お世話になりました。こしん展でみなさん
よろこんでコーヒー飲んでいってくれます。●お大切に下さってください。
●わずかですが、募金に入れて下さい。